

令和6年度全建賞 推 薦 調 書
インフラ整備の事業又は施策の部(インフラの部)

ふ り が な	こうこうせいしょうがっこうでぼうさいこうざのせんせいに～ぼうさいいんふるえんさーいくせいにむけたとりくみ～
1. 事業(施策)の名称	高校生が小学校で防災講座の先生に ～防災インフルエンサー育成に向けた取り組み～
2. 事業(施策)実施期間(和暦)	令和6年2月1日 ～ 令和6年 10 月 31 日
3. 事業費(工事費)	30 万
4. キーワード	防災の伝え手、防災インフルエンサー、避難インフルエンサー、防災教育、防災授業、高校生の育成
5. 事業概要	当協会地域づくり技術研究所と岐阜県立岐阜総合学園高校が連携し、環境テクノロジー系列の生徒 27 名に対し、防災の知識を身に付け、過去の災害を伝えることができ、災害時に声掛けもできる防災インフルエンサー育成の一環として、小学校で防災授業の先生ができる様、育成を行った。

6. アピールする事業又は施策の「手段」と「秀でた成果」		
ハード or ソフトの分類 :該当する方に○印	① ハード面 に秀でた事業	② ソフト面 に秀でた取組
アピールする 1)「手段」	() () () ()	(b) 小学校・高校との連携 (c) 情報発信(HP・SNS 等の活用・メディアの発信等) (i) 高校生による防災授業
アピールする 2)「秀でた成果」	() () () ()	(l) 高校生による防災授業 (i) 防災の伝え手育成 (l) 防災(避難)インフルエンサー育成 (l) 防災教育支援

7. 特にアピールしたい点
災害から大切な命を守るためには、地域を担う若者が防災の基礎知識を身に付け、「守られる人から守る人」になって地域の守り手として地域防災力の向上を図る必要がある。しかし、学校で教えるにも先生方は多忙で、自身が防災について学習し教材を作成して教える事が困難な実情がある。そこで、当協会地域づくり技術研究所と岐阜県立岐阜総合学園高校が連携し、当研究所職員が講師となり、防災(避難)インフルエンサーとして、高校生が小学校で先生として防災授業が実施できることを目標に育成に取り組んだ。

8. 事業を代表する写真及びキャプション

高校生の育成に向けた授業



高校生が先生となった小学校における防災の授業



9. 事業内容・添付資料〔特徴を示す写真、諸元(位置図、標準断面図、施策のフローチャート、P Iの方法 等)〕

1. はじめに

近年、全国各地で災害が頻発するなか、避難情報が出されても「自分は大丈夫」と考え、正常性バイアスにより避難を決断できずに犠牲となってしまうケースが多くみられる。一方で、家族や近所の人など周囲の人からの声掛けで避難に繋がり、助かった事例もある。水害時の避難のきっかけは、周囲の人の呼びかけによるとの回答が3割を超えたとのデータもある。また、当協会地域づくり技術研究所が実施している防災講座でのアンケートでは、伊勢湾台風を知らない子供は約50%、中部地域で近年に最も大規模な災害であった東海豪雨についても忘れられてきている実態がある。中部地方では近年、広域的な大規模災害が発生していない中、これらの課題に対応し、災害から大切な命を守るためには、地域を担う若者が防災の基礎知識を身に付け、「守られる人から守る人」になって地域の守り手として地域防災力の向上を図る必要がある。そこで、当研究所と岐阜県立岐阜総合学園高校が連携し、防災の知識を身に付け、過去の災害を伝えることができる、災害時に声掛けも出来る防災(避難)インフルエンサー育成に向け、建設環境テクノロジー系列専攻の生徒27名を当研究所職員が先生となって育成することとした。土木や建築を学ぶ生徒は、道路や河川、まちづくりなどの社会資本整備に携わる機会が多いことから災害への繋がりも強い。また、高校生は小中学生に年齢が近く、話が受け入れられやすいことや、当校では一定の授業時間の確保も可能であることも、高校生をターゲットとした理由である。

2. 高校生育成に向けた防災教育

育成に向けた授業実施にあたり、令和5年度から学校と調整を開始。テーマは、この地域が過去から水害に悩まされてきていることから、水害を題材として学習することとした。

育成プログラムを作成し、目的、ねらい、学習方針、授業時間などを学校と調整した。水害に関する事例や教訓、備えなどについて学び、理解すると共に、防災(避難)インフルエンサーとして小学生や中学生に伝え(教え)られるスキルを身に付け、小・中学校での防災授業の実践を具体的な目標とした。また、これを実施することの効果は、災害についての知識を得るだけではなく、社会人としての下記のスキルにも繋がる。

- | | |
|--------------------|--------------|
| ① 知識を身に付ける(物事を調べる) | → 探求心 |
| ② 聞き手の立場を理解する | → 思いやり |
| ③ 伝える工夫 | → コミュニケーション力 |
| ④ 人前で話す | → プレゼンテーション力 |
| ⑤ 人・社会の役に立つ | → やりがい |

目標を達成するため、学習時間は実習の時間を活用し、深く学ぶ必要があることから1回当たり2時限の授業を15回確保して頂いた。初回の授業では、この取組の必要性を生徒に理解させるとともに、本番の防災授業の手本を見せた。また、より自分事に捉えられるよう、講義だけではなく、VRによる浸水体験や現地で過去の水害の浸水状況を確認するなど、体験を通して水害を実感した。その後、授業の内容をパート分けし、各自の担当部分を決め、より理解を深めるため、各自が担当する部分の説明資料を、当協会の資料を見本に各自が作成した。最後は本番と同様にプレゼンのデモを行って本番に臨んだ。また、生徒の理解度には差が出るため、それを埋めるため、授業時間以外でも学習するよう先生の協力も得た。

3. 高校生が先生となった小学校における防災授業の実施

防災授業を行う学校は、親近感のある同じ学区内にある小学校を選定した。事前に小学校と打ち合わせを行い、授業の内容などについて調整し、対象は5年生 137 名(4クラス)を2グループに分け行う事とした。先生からは、お兄さんやお姉さんから教えてもらう事は、子供たちにとって伝わり方が違うのでとても良い体験になるとの好意的な意見と、是非、高校生と触れ合える時間や質問の時間を取って欲しいとの意見を頂いた。

これらの意見も踏まえ、最終的な授業の進め方を決定した。授業の中で行う防災実験は、触れ合う時間を創出するため、生徒全員で対応することとし、また、分からないところや不足する部分は、当協会の職員がフォローすることとした。

当日は、生徒各自が、どうすれば子供たちに伝わるかを意識し、工夫をして一生懸命に行っていたことからデモ以上の出来栄であった。また、児童の質問にも分かる範囲ではあるが一生懸命に答えていたことに好感が持てた。

4. 防災の授業の感想・意見(抜粋)

小学生の先生の意見

- ・高校生の皆さんが学習したこと、児童に分かりやすく伝えようとする姿に感動した。気圧など、児童が分からない言葉はいくつかあったが、ゆっくり話したり、クイズを取り入れたり工夫して話して下さった。
- ・子どもたちと歳の近い人と関わることで、とても嬉しそうだった。高校生はもっと積極的に関わってくれとありがたい。安八豪雨や伊勢湾台風といった、自分の地域の近辺で起きた災害を取り上げていただいたおかげで、子どもたちも自分ごととして捉えることができたと思う。

児童の高校生に関する感想

- ・話を聞いて興味を持てたし、早く避難しないといけないと改めて思った。
- ・教えてもらったことを家とか学校で生かしたい。
- ・分かりやすくて、さすがだと思った。水害についてもっと知りたいと思った。
- ・分かりやすく説明をしていたので良かった。水害についてよく分かった。
- ・高校生の人たちが、僕たちに教えてくれるために勉強してくれて、分かりやすくしてくれるために努力してくれたのがとてもすごかった。

学習の流れ

1. 過去の自然災害(風水害と地震災害)の概要と対策
2. 地域(岐阜県)で発生した過去の水害
3. 日本全国で発生した水害
4. 浸水疑似体験(VR体験)やハザードマップ、マイタイムライン
5. 防災実験による水害のメカニズム等
6. 水害への備え、過去の浸水状況の現地確認
7. まとめと防災(避難)インフルエンサーとしての準備、デモンストレーション
8. 防災(避難)インフルエンサーとして、防災講座の実体験

岐阜総合学園高校 生徒の感想

- ・小学生の意欲的な姿勢に刺激を受け、より多くのことを伝えたいと感じ、より詳しい内容を付け加えて話をした。
- ・普段人前で話をする機会が少ないため、良い経験となった。
- ・緊張したが、小学生が真剣に説明を聞いてくれて反応してくれたから説明しやすかった。
- ・質問をした時に自分たちが想像していなかった回答が返ってきて驚いた。
- ・一連の学習を通して、人に伝えるためには、その何倍も知識を持たなければ理解してもらえないことが分かった。

岐阜総合学園高校 先生の感想

- ・普段の授業では見られない、生徒の新たな一面を知ることができた。
- ・学校で学んだことは将来に繋がらないことも多いが、今回、防災を学び、将来にわたっての必要な知識を得ることができた。通常の授業に比べ、より深く学ぶことができ、社会で生きていくうえでの知識を得られ、伝えていく立場となったことで、更にステップアップした。社会に貢献するきっかけ作りになった。
- ・建設は多くの人の命を守っていく側面もあり、知識を伝えることは、何歩も踏み込んだ学習となった。
- ・学習期間が4月から9月、授業の本番が10月であり、長期間にわたったことから生徒に間延び感があった。
- ・ドローン授業など、他の授業と連携して学ぶことで更に深い学びに繋がるのではないかな。

9. 事業内容・添付資料〔特徴を示す写真、諸元（位置図、標準断面図、施策のフローチャート、P Iの方法 等）〕

5. 終わりに

高校生が、子供たちに教えるためのスキルを習得することは短期間では難しく、指導には苦勞したが、繰り返し学ぶことで理解を深めていった。今回、生徒が知識を十分に習得するところまではいかなかった部分もあるが、最終目標を授業で子供たちに教えることとしたことは、学習意欲の向上に繋がり、スキルを習得するためには有効であった。子供たちが年齢の近い生徒から教えてもらう事は、自分たちも、「そうなりたい」、「そうになれるのではないか」と思い、大人が教える場合と比べ、手本として見ている様子が伺えた。また、防災への興味と近い将来、地域づくりに携わることを目指すことにも繋がり、次の世代の人材育成にも寄与する。更に、授業を受けた子供たちが家に帰って親に伝えることで、防災の重要性の広がりが期待できる。

今回の取組では、伝え手となる高校生を育成することの効果と重要性が確認できた。育成には継続した教育が必要であり、来年も本校とこの取組を継続していくこととしている。今後も他校への拡大も含め、若者の防災(避難)インフルエンサーを育成する取組を推進していきたいと考えている。